

原爆被爆二世における個々の多因子疾患への放射線リスク： 臨床健康診断調査[§]

Radiation Risk of Individual Multifactorial Diseases in Offspring of the Atomic-bomb Survivors: A Clinical Health Study

立川佳美 John B Cologne Wan-Ling Hsu 山田美智子 大石和佳 飛田あゆみ
古川恭治 高橋規郎 中村 典 陶山昭彦 小笹晃太郎 赤星正純 藤原佐枝子
Roy E Shore

要 約

成人期に発生する多因子疾患における放射線被曝による遺伝的リスクは、放射線に被曝した集団の防護ならびに管理の観点から重要であるが、ヒトにおけるその確かな証拠はない。本研究では、被爆二世において親の原爆放射線被曝が、一般によく見られる多くの遺伝子が関与した多因子疾患である高血圧、高コレステロール血症、糖尿病、狭心症、心筋梗塞、脳卒中のリスク増加をもたらしているか否かを検討することを目的とした。広島・長崎の被爆二世 11,951 人を対象に健康診断を実施し、各疾患の有病率を評価した。男性および女性の被爆二世において、父親線量、母親線量、あるいは両親の線量を合計した線量のいずれも、個々の多因子疾患のリスク増加と関係しているという証拠は見られなかった。また、線量と疾患の組み合わせによる 18 通りのすべての解析においては、他のリスク因子の調整後も放射線量反応に統計学的に有意なリスクの上昇は見られなかった。しかしながら、研究対象集団はまだ中年期(平均年齢は 48.6 歳)にあり、今後、多因子疾患の発生増加が見込まれる。現在進行中の長期追跡調査は、成人期発生の多因子疾患発生への遺伝的影響に関して更に有用なリスク評価を可能にするであろう。

[§] 本報告書は *J Radiol Prot* 2013 (June); 33(2):281–93 (doi: [10.1088/0952-4746/33/2/281](https://doi.org/10.1088/0952-4746/33/2/281)) に掲載されたものであり、その正文は同掲載論文のテキスト(英文)である。この日本語要約は、日本の読者の便宜のために放影研が IOP Publishing の許可を得て作成したが、本報告書を引用し、またはその他の方法で使用するときは、同掲載論文のテキスト(英文)によるべきである。 © 2013 IOP Publishing Ltd. All rights reserved